

ロータリーのある住宅地

拙宅があるのは大阪府北部。阪急電鉄の沿線です。もともとの住民が少なく、ほとんどは他地域からの移入者とその子孫。大阪でありながら、大阪的でない雰囲気もある地域です。使われる言葉も大阪弁と標準語が入り交じった言葉が地域の標準語。筆者も、その方言を使います。柔らかい大阪弁です。

阪急沿線の住宅地を開発したのは小林一三。阪急電鉄・宝塚歌劇団・阪急百貨店・東宝をはじめとする阪急東宝グループ(現・阪急阪神東宝グループ)の創業者です。桜が好きだったようで、どの住宅地にも桜並木がつくられています。そのため、阪急沿線は他地域より桜が多く、春の花見は手近な住宅地で十分に楽しめます。拙宅の近所では池田市室町、石橋荘園、箕面市桜井などが初期の住宅地。それ以外にも、同様の住宅地が残っています。

ちなみに、小林一三が現在の阪急電鉄宝塚線を完成させたのは1910年。日露戦争が終わり、日本が重工業に軸足を移しつつあった時期です。熟練工を確保するため、長期雇用に向けた人事制度が大企業で取組み始められた頃。ただし、「大大阪時代」と言われる経済発展時期よりも、少し前の時期です。大阪北部は田畑が広がり、電車の顧客が確保できない時期でした。そんな時期に「顧客は電車が創造する」と述べ、「サラリー



中嶋哲夫の

「人事も歩けば」



▲かつての理想の住宅地を思わせる風景

マンの理想の住宅」を開発して、「割賦販売のシステム」で住宅を売ったのが小林一三でした。それが、先の見通しがつく安定的雇用のサラリーマンの増加時期にマッチしたようです。ターミナルには百貨店と遊園地、沿線に大学を誘致と、顧客をつくり出す事業をどんどん手がけ、後の私鉄経営モデルをつくりました。

近所に1927年に開発された住宅地があります。まさに大大阪時代に開発された住宅地。相続による土地の分割が少なく、いまだに100坪～300坪ほどの敷地が並び、広い道路に桜並木が植えられています。駅から少し遠いのですが、その分、区画を大きくできたのでしょう。住宅地の真ん中にロータリーがあり、そのなかに、立派な住宅開発記念碑が残っています。当時の理想の住宅地だったのでしょう。

長期雇用が始まる時期に、それを前提とする住宅や割賦販売のシステムが開発されています。先の見通しがあると、消費が活気づくことを、近所の住宅地で改めて感じます。

(MBO実践支援センター代表 大阪商業大学特任教授)